「『潟』の記憶―潟と共に生きる人々の物語―」　制作を終えて

隅　杏奈　研究員／潟環境研究所事務局

1. はじめに

昭和20年代以降、水田の乾田化や潟の干拓によって、新潟市における潟端の暮らしは大きく変わった。潟の動植物を生活の糧とする世代が高齢化し、潟と共に歩んできたその記憶は失われつつある。そのような問題意識から、潟環境研究所では潟端の暮らしの記憶を記録し、後世に伝えるという目的で映像を制作した。

2015年8月から2016年2月の間、佐潟、上堰潟、鳥屋野潟、福島潟で撮影を実施した。季節ごとの潟での活動を記録し、潟端に暮らす人々への聞き取りをおこなった。撮影と編集は映像制作会社に委託し、「『潟』の記憶―潟と共に生きる人々の物語―」として47分の映像にまとめた。映像制作業務の担当として制作に携わった筆者[1]が、この映像を制作する過程で考えたことを述べ、最後に、撮影を通して関わってもらった地域の人々への研究成果の還元という観点から、今後の映像の活用の可能性を示したい。

2.　映像制作の狙いと構成

2. 1.　映像制作でめざしたこと

撮影のため、どのような人々に話をきけばよいかを検討しているなかで、関心を持ったのが、ヨシやマコモ、ヒシやハス、コイやフナなどの魚、野鳥など、潟の動植物を生活の糧にしてきた人々である。潟の自然環境の豊かさを人々の暮らしの記憶から、描くことはできないかと考え、DVD版として制作する映像のテーマとして、人々の潟との関わりを中心に据えた。

人々の経験や記憶から、新潟市の「潟」が浮かび上がってくる、というようなものを目指し、映像全体の構成として、人物が経験してきた潟端の暮らしについて語るインタビュー映像を比較的長く収録した。

映像は、観る側に伝わるようにある程度ストーリー構成をしている。編集の過程で、人々が語った言葉は、切り取られ、映像として現れているものは部分的でしかない。それゆえ、制作した映像は、「これを見れば、潟のことが全てわかる」という概説的なものではない。

それでも、人物の語る映像を中心とした理由は、そこで暮らした人物の語りを「聞く」という筆者自身の経験を、観る側に追体験してほしいと思ったからである[2]。人物の語りを「聞く」という経験は、内容によほど興味がない限り、退屈なことかもしれない。しかし、今回、撮影に協力してくれた人々の語りを代弁してナレーションとして映像にのせるよりも、語る人の表情を含め伝えるほうが、制作側の意図がより伝わると考えたからだ。

2. 2.　映像の構成

映像は佐潟、上堰潟、鳥屋野潟、福島潟の4つの潟の話で構成されている。以下にその内容の一部を紹介したい。

2. 2. 1.　佐潟

新潟市西区赤塚に位置する佐潟では、盆にハスの花とりが行われる。佐潟で収穫されたハスの花や、地元の人が「トバス」と呼ぶ花托は、地元の商店や近隣のスーパーで販売され、仏花として、墓前や仏壇に供えられる。

戦後、赤塚漁業協同組合が発足した当時からの組合員、青柳一男さん（昭和7年生まれ）に話を聞いた。青柳さんは農家であるが、冬場の時期には漁で収入を得ていた。現在では舟で佐潟にでることはなくなったが、佐潟でのハスの花とりや冬場の漁に長年、携わってきた。

青柳さんはトッコウと呼ばれる漁具を使って漁をしていたという。トッコウは円錐系のかぶせ網で、水底に魚が呼吸する穴を目視で確認してからかぶせ、網のなかにタモ網をいれてすくう方法で魚をとった。この漁法は佐潟の水が濁りはじめてから、次第におこなわれなくなったという。

11月になると佐潟での漁がはじまる。近年では、数人で協力して行う地引網漁が主流となったが、“漁師”たちの冬場の楽しみとして続けられている。

ハスの花を一本ずつ刈り取る（佐潟）

2. 2. 2.　上堰潟

角田山の麓に位置し、現在では多くの人々が訪れる憩の公園となった西蒲区の上堰潟。9月、上堰潟田舟の会が、上堰潟に新しい田舟を浮かべるというので、その様子を撮影させてもらった。

上堰潟の水はかつて、農業の灌漑用水源として利用されていた。田舟は、潟の周辺に広がる田で農作業をする

ために、かかせないものであった。上堰潟田舟の会の齋藤一雄さん（昭和20年生まれ）は、子どもの頃、農作業用に係留してある舟を拝借して遊ぶのが楽しみだったという。当時の子どもたちにとって上堰潟は格好の遊び場だった。春になると、上堰潟周辺の田には雪解け水が溜まり、潟から田んぼに上がった魚をとったという。

周辺の耕地整理が終わり、潟の水は干上がって一度荒地になった上堰潟は、平成5年度から平成11年度にかけての整備事業によって、再び潟を掘り起し、洪水調整池を兼ねた公園として整備された。

齋藤さんが「宝になると思って残しておいた」という田舟や、新しく造った田舟はイベント時や地元の小学生向けの乗船体験で利用されている。

新しい田舟を漕ぐ（上堰潟）

2. 2. 3.　鳥屋野潟

中央区の鳥屋野潟南部に清五郎という地区がある。かつて、清五郎の集落には集落を貫くように鳥屋野潟と清五郎潟をつなぐ川が流れていた[3)]。その川は集落の暮らしと密接に関わっていた。かつては、生活用水、飲み水として川の水を使っていた。収穫した稲は、川端にあったハサ木にかけて干すために、舟で運んだ。

「舟漕ぐのなんて自然ですわ。歩くと同じ。」という松原昇平さん（大正14年生まれ）。昭和23年に栗ノ木川排水機場ができる以前、清五郎川や鳥屋野潟、栗ノ木川を舟で漕いで移動した経験がある。

鳥屋野潟の撮影では、鳥屋野潟漁業協同組合の協力で、かつて鳥屋野潟、清五郎潟でおこなわれた投網、刺網、オウギアミを用いた漁法を実演してもらい、記録した。投網や刺網はある程度の大きさのあるコイやフナを狙い、オウギアミは雑魚をとるために用いた。現在では、鳥屋野潟で漁をする人は数人になったが、自給用にとる他、地域の催しで食されている。

投網をうつ（鳥屋野潟）

2. 2. 4.　福島潟

北区にある市内最大の潟、福島潟。かつて、潟端の集落の女性たちが、ヒシの実を収穫し、市場にだすなどして、収入を得ていた。

9月、ヒシの実の収穫を撮影した。ヒシの葉で覆いつくされた水面は、潟に舟をだし、手でヒシの葉をつかんで裏返すと、ひとつずつ実をもぎとっていった。

潟端の新鼻甲に暮らしてきた横山フヂノさん（大正14年生まれ）は、ヒシもぎやヨシ刈りをして家計の足しにしていたという。ヨシ刈りは入札で刈る場を決めた。下草を手で落としながらヨシだけを両手で抱えるほどの束にしていく。よいときで、一日に30束ほど刈ったというヨシは、良い収入になったという。

水の駅「ビュー福島潟」潟来亭の管理人で福島潟の潟端に暮らす、佐藤了さんと長谷川哲夫さんは、現在でも福島潟で漁をしている数少ない“漁師”だ。福島潟とつながる新郷川で川ガニをとった話、かぶせ網を使い、フナなどの魚をとっていた話をきかせてくれた。潟では、かつて簀立てをたてて、本格的な漁もおこなわれていたという。福島潟の干拓が終わる昭和40年代以降、漁にでる人は少なくなった。

しかし、近年、地元の新鼻甲自治会では、地域の行事やイベントで、福島潟でとれたヒシやハスの実、雑魚や川ガニなどの潟の食材を使った料理を振る舞う活動に取り組んでいる。

ヒシの葉が茂る潟に漕ぎ出す（福島潟）

3.　映像制作を通して考えたこと

撮影を通して、かつての潟の動植物を生活の糧にする暮らしが、いまも人々の記憶のなかに息づいていることがみえてきた。そして、潟と人との関係性は変化しながらも続いている。そのひとつに“漁師”らの姿がある。かつてのように漁で収入を得るということはほとんどなく

なった現在、なぜ“漁師”らは漁を続けているのだろうか。

冬になると毎週末、漁師小屋に集まり地引網や刺網を使って魚をとる人々の活動を、昔を懐かしむ高齢者の「趣味」とだけで捉えてよいのだろうか。経済性が以前よりも薄れてきた現在の潟での漁と、それらを続ける人々の姿を、自然との付き合い方の鍵として考えることはできないだろうか。

潟での漁の経験がある人々に聞き取りをするなかで、「好きだからやっている」と純粋に漁のおもしろさを語る場面があった。例えば、前述した佐潟の青柳さんは、かつて佐潟でおこなっていたトッコウは、腕次第で多くの魚がとれ、「おもしろい」と語っている。また、よくとれる日とそうでない日があるから余計にのめりこむという。

地引網にかかった魚をとりあげる（佐潟）

コイやフナがどういうところにいて、どのように漁具を扱えば、上手にとれるのか。撮影を通して見聞きしたこのような話からは、潟との関わりのなかで感覚的に身につけた、自然に対する知識と技術がうかがえる。民俗世界において、マイナー・サブシステンス[4] がもつ意味を考察した松井は、「一年の周期のもとに繰り返されるマイナー・サブシステンスに熱中することによって、また、あるいは単にその成果を食するだけにしても、人々は一年の周期性を身体の活動を通して、すなわち意識化されるより深い次元で感得していくということに注目しなければならない」と指摘する（松井1998）。

そうした、人と自然との関わり方に注目すると、その背後に、自然と人間との相互の関係性を支える社会の仕組みがあることに気づかされる。

佐潟では、明治時代から、村会議で決定した請負人によって水鳥、魚や蓮根などの潟の産物の収穫と維持管理がおこなわれ、村の重要な資源と認識されていた（太田2016）。そうした歴史的経緯があるなかで、現在でも地域住民による水門の管理やハスの花とり、漁がおこなわれている。

収穫されたハスの花が地域の商店に卸され、仏花として地域住民によって消費される一連の過程。以前に比べ、潟の魚を買いにくる人はほとんどいないというものの、地域のイベントで販売するために、近隣の町から懐かしんで魚を買い求めにくる人のために、漁をする人々。

映像のなかでは、その一部分しか描く事ができなかったが、いま現在、潟と人との関係が、地域にとってどういう意味をもっているのか。潟の性質とそれをとりまく地域性、地域住民の潟との関わり方の歴史は、それぞれ異なることを踏まえ、改めて具体的に描くことを今後の課題としたい。人がどのように潟を活用していたのか、ひいては、人がどのように自然と付き合ってきたのか、その歴史をこれからの潟の環境保全に活かしていくことが必要だと考えるからだ。

4. おわりに

制作した映像は、今後どのように活用することができるだろうか。撮影の対象とした市内の4つの潟とその潟端地域の人々に対し、協力していただいたものの成果として、何を地域に還元することができるかを考えなければならない。

そのひとつとして、映像はそれぞれの潟の地域性と歴史を地域内で共有するツールとして使うことができるだろう。特に、潟の近くで暮らしてきた地域の人々にこそ、みていただきたいと考えている。映像に対する人々の反応は、貴重な情報となりうるし、潟の環境保全とその周辺地域の今後の展開のきっかけにすることができる。

潟が近くにある地域の学校では、すでに、地元住民と学校とが協力し、地域教育を展開しているところもある。今回撮影に協力してくれた人々のなかにも学校との関係を築き、潟の生き物や歴史を題材としながら、児童たちに出前授業をしている方がいる。そうした機会に、この映像を活用してもらうなど、検討していきたい。

制作した映像のDVD版は2016年5月現在、市内の視聴覚資料を扱う図書館で視聴と貸出ができる。また、より多くの方にみてもらえるように、潟環境研究所ホームページ『潟のデジタル博物館』でも同じ映像を公開している。

半年間、複数回にわたりおこなった潟での撮影は、天候に恵まれた。上空から映した潟の姿、早朝に朝靄がかかる潟、季節や場所によって異なる景色がとても美しい。

あれこれと、映像制作にまつわる思いを述べてきたが、ただ眺めているだけでも、新潟市の潟の美しさを感じられるものになったと思う。この映像が観る人にとって、何かの発想の種になれば幸いである。

謝辞

映像制作にあたり、多くの方に協力いただいた。とりわけ、青柳一男さん、大野彦栄さん、金子勲さん、小林

正芳さん、齋藤一雄さん、佐藤了さん、田中保夫さん、長谷川哲夫さん、増井勝弘さん、松原アキミさん、松原昇平さん、松原ヨミさん、丸山稔さん、森田忠夫さん、横山愛子さん、横山フヂノさん、赤塚漁業協同組合、上堰潟田舟の会、新鼻甲自治会、鳥屋野潟漁業協同組合のみなさまには、長時間にわたる撮影に協力いただいた。また、新潟市歴史博物館には資料提供をしていただいた。石田博道さん、小林昭栄さん、斎藤文夫さん、亀田郷土地改良区には写真提供をしていただいた。映像制作は多くの方の協力なしには、実現することはできなかった。協力いただいたみなさまに、心より感謝申し上げる。最後に、素晴らしい映像を撮影・編集していただいた株式会社電通東日本・株式会社コムの方々に感謝申し上げたい。

注

1) 大学院で文化人類学を専攻して修士過程を修了したが映像制作に関しては素人であった。
2) 映像人類学の考え方（田沼2015）から着想を得た。
3) 昭和23年に栗ノ木川排水機場が完成し、鳥屋野潟の水位が下がると、清五郎川の水位も下がり、川端の家屋が傾くなどの影響がでた。昭和42年に親松排水機が運転開始されるとともに、清五郎排水路が新設されたため、清五郎川が不要になり埋め立てられた（大野1985）。現在では川跡がそのまま集落を貫く道路になっている。
4) 「集団にとって最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」（松井1998）をメジャーなサブシステンス（生業）に対してマイナー・サブシステンスと呼んでいる。

参考文献

太田和宏（2015）新潟市西区に関する潟と人との共存（里潟）について～潟の歴史的関わりについて（佐潟を中心として）～．平成26年度　新潟市潟環境研究所研究成果報告，p65-87

大野儀一（1985）清五郎の今昔

田沼幸子（2015）＜人類学的＞映像の生成―『Cuba Sentimental』の事例を通じて―．文化人類学 80/1，p20-36

新潟市（1975）新潟市合併町村の歴史 第一巻・西蒲原郡から合併した町村の歴史．新潟市

松井健（1998）マイナー・サブシステンスの世界―民俗世界における労働・自然・身体．現代民俗学の視点1民俗の技術．P247-268，朝倉書店

ＤＶＤパッケージ

（おもて）

（うら）

ＤＶＤ版